

# 史跡横須賀城跡VIII・IX

平成3年度・4年度保存修理事業概報

1993

大須賀町教育委員会







# 史跡横須賀城跡VIII・IX

平成3年度・4年度保存修理事業概報

1993

大須賀町教育委員会



## 例　　言

1. 本書は静岡県小笠郡大須賀町に所在する史跡横須賀城跡の平成3年度4年度保存修理事業の概要報告書である。
2. 保存修理事業は国県の補助金を受けて大須賀町教育委員会が実施した。
3. 保存事業に伴う発掘調査は斎藤忠（大正大学名誉教授）、小和田哲男（静岡大学教授）高瀬要一（奈良国立文化財研究所）の指導のもと、大須賀町教育委員会の木佐森道弘が担当し、調査に関する事務は大須賀町教育委員会事務局があたった。
4. 本書の執筆分担は以下のとおりである。  
第1章・第2章・第3章を木佐森が執筆し、斎藤が総括した。
5. 本書の編集は木佐森がおこなった。
6. 造構全体図は（財）文化財建造物保存技術協会が測量した図面を、木佐森が一部加筆修正したものを使った。
7. 発掘調査に係わる資料は大須賀町教育委員会が保管している。
8. 調査ならびに本書の執筆にあたり、下記の方々のご教示を得た。記して感謝の意を表したい。  
(敬称略)  
五味盛重・泉敬常・塚本和弘・松井一明・加藤理文・岡田昇

### 9. 発掘調査参加者

平成3年度

藤田長吉・戸塚重一・服部惣一郎・岡田賢一・宇佐美新・杉山朝雄・進士高逸  
藤山喜代志・宮田力・金丸久子・佐々木はるゑ・加藤きぬ枝・寺澤美恵子・宇佐美敏子  
渥美幸・井口静恵・土屋ふみ子・佐野いと・堀江つね・赤堀一江・榎原祥子

平成4年度

岡田賢一・宇佐美新・杉山朝雄・太田光男・金丸久子・佐々木はるゑ・寺澤美恵子  
加藤きぬ枝・宇佐美敏子・佐野いと・堀江つね・赤堀一江・榎原祥子  
(大須賀町シルバー人材活用センター進士三郎・金原米作)

## 本文目次

第1章	平成3年度・4年度の事業概要	1
	第1節 土地の公有化事業	1
	第2節 発掘調査事業	1
	第3節 環境整備事業	1
	第4節 保存管理事業	2
	第5節 整備委員会及び保存に係わる会議等	3
	第6節 史跡の現状変更	3
第2章	発掘調査の概要	5
	第1節 調査に至る経緯経過	5
	第2節 調査の方法	7
	第3節 造構について	7
	第4節 遺物について	23
第3章	まとめ	33

## 挿図目次

第1図	標柱設置位置図	2
第2図	横須賀城跡位置図	4
第3図	発掘調査区域図	9
第4図	造構全体図	11
第5図	横須賀城本丸前造構概念図	13
第6図	方形石積み造構(造構08)実測図	19
第7図	出土瓦拓影図(1)	24
第8図	出土瓦拓影図(2)	26
第9図	出土瓦拓影図(3)	27
第10図	出土瓦拓影図(4)	28
第11図	出土瓦拓影図(5)	31

## 図 版 目 次

- 図版 1 調査前状況 遺構全景（西より）
- 図版 2 遺構全景（南より） 本丸突出部分西斜面舌状台地
- 図版 3 権門東側舌状台地（西より） 権門東側舌状台地（南より） 作業風景
- 図版 4 遺構01上り道状遺構（西より） 遺構01上り道状遺構（南より）  
遺構01石積み全体
- 図版 5 遺構01石積み 遺構01石積み状態 遺構02権門平坦面東北コ-ナ-
- 図版 6 遺構02東北コ-ナ-と青色粘土埋立 遺構02東北コ-ナ-石列  
造構02新旧東北コーナーと石垣裏込め栗石
- 図版 7 遺構02、03と石垣裏込め栗石 遺構03石垣根石列 遺構03、02石垣根石
- 図版 8 遺構03石垣根石据え方状態 遺構04石垣 遺構04石垣北半部分
- 図版 9 遺構04石垣南半部分 遺構04石垣北側屈折部分 遺構05西北コ-ナ-石垣
- 図版10 遺構05西北コ-ナ-石垣 遺構05西北コ-ナ- 遺構05北側石垣石組み状態
- 図版11 遺構06、07 遺構06 遺構07
- 図版12 遺構08（南より） 遺構08（東より） 遺構08遺構内遺物出土状態
- 図版13 遺構08石積み状態 遺構12、13権門下東西コ-ナ-石垣および裏込め  
造構12権門下西側コ-ナ-石垣
- 図版14 遺構12北半石積状態 遺構12南半石積み状態 遺構12北側屈折部根石
- 図版15 遺構13権門下東側コ-ナ-石垣 遺構13コ-ナ-と裏込め 遺構13コ-ナ-部分
- 図版16 門前スロ-ガ状張出部分瓦溜まり 瓦溜まりおよびスロ-ガ西側石垣裏込め分布状態  
瓦廃棄状態
- 図版17 瓦溜まり立葵文軒丸瓦検出状態 遺構14（南より） 遺構14（東より）
- 図版18 遺構14石列石組状態 遺構16 遺構16据石状態
- 図版19 出土遺物 1
- 図版20 出土遺物 2
- 図版21 出土遺物 3
- 図版22 出土遺物 4



## 第1章 平成3年度4年度の事業概要

### 第1節 土地の公有化事業

本年度は、昭和63年度に実施した外堀跡の土地先行取得事業の元金利子の償還をおこなった。

#### 平成3年度償還額

事業費	31,606,427円
国庫補助金	25,284,000円
県費補助金	2,107,000円
平成4年度償還額	
事業費	30,373,674円
国庫補助金	24,298,000円
県費補助金	2,025,000円

### 第2節 発掘調査事業

今回の調査は本丸前の整備計画に伴う資料を得るための発掘調査である。

国立国会図書館などに所蔵されている古絵図によると、今回の調査地には本丸前の谷を塞ぐ形で櫓門が描かれていて、その斜面には門を取り囲むように石垣が描かれている。また、門のある平坦面から本丸へ上の道が三ヶ所描かれている。これらの遺構の検出を大きな目標とした。そのうち平成3年度には本丸前斜面と、それについて平坦面の一部について発掘調査をおこなった。平成4年度はその前面の平坦面と、その東側の突出部分について発掘調査をおこなった。

### 第3節 環境整備事業

平成3年度は本丸前復原整備の資料を得るため、斜面の上場と下場の2ヶ所についてボーリングによる土質調査をおこなった。また、3年度の環境整備事業として見学者の利便をはかるために説明板と標柱の設置をおこなった。

#### 説明板

三日月池の端に設置してあった説明板が老朽化し、倒伏したため新調した。設置位置が民家の駐車場に隣接して、再設置が困難なため、環境整備が済んでいる西側の駐車場内に新たに設置し直した。

#### 標柱

指定地内の要所に白い角柱の標柱を設置した。表面にはその場所の当時の名称を入れ、側面には簡単な説明を入れた。また裏面には設置年月と設置者名をいた。指定地内の要所にくまなく設置する考えであったが、民有地はなるべく避けて公有地内に設置したため重要な部分で設置さ

れていないところもある。設置基数は14基、設置した位置は以下のとおりである。①『米藏跡』（公有地内整備済地）②『天守台跡』（公有地内整備済地）③『北の丸跡』（公有地内未整備地）④『松尾山』（公有地内未整備地）⑤『横須賀城外堀跡（裏堀）』（公有地内多目的センタ－敷地）⑥『横須賀城外堀跡（裏堀）』（公有地内未整備地）⑦『横須賀城跡三日月池』（公有地内未整備地）⑧『二の丸跡』（公有地内幼稚園敷地）⑨『横須賀城外堀跡』（公有地内未整備地）⑩『横須賀城外堀跡』（公有地内未整備地）⑪『西櫓跡』（公有地未整備地）⑫『横須賀城跡西大手門跡』（公有地内未整備地）⑬『横須賀城跡からぱり跡』（公有地未整備地）⑭『横須賀城不開門跡』（民有地内）



第1図 標柱設置位置図

#### 第4節 保存管理事業

整備の済んだ公園の年間管理と、未整備地の草刈りについては専門業者への業務委託によりおこなった。梅園管理については平成4年度から大須賀町郷土研究会の管理を離れ大須賀町教育委員会に管理が移管された。城跡公園トイレの清掃は大須賀町日赤奉仕団等の地元のボランティア団体にお願いしている。しかし、心無い利用者のいたずらやごみの投棄などでみなさんにはご迷惑をかける事がしばしばである。特に平成4年度の末には男子トイレの廻りが破壊される悪質ないたずらがなされ、その修繕に急遽補正予算で対応した。モラルの低下が嘆かれる。

## 第5節 整備委員会及び保存に係わる会議等

整備委員会を下記のとおり開催し、発掘調査、環境整備等の保存整備事業全般にわたって協議検討をおこなった。

会議の日程は下記のとおりである。

### 平成3年度

- |           |                            |
|-----------|----------------------------|
| 平成3年7月25日 | 城跡整備委員会（先生、文化庁調査官のみの特別委員会） |
| 平成3年9月12日 | 城跡整備委員会（地元委員のみの特別委員会）      |
| 平成3年12月4日 | 城跡整備委員会                    |
| 平成4年3月27日 | 城跡整備委員会                    |

### 平成4年度

- |           |         |
|-----------|---------|
| 平成5年2月26日 | 城跡整備委員会 |
|-----------|---------|

その他、保存修理事業に伴う発掘調査、史跡の現状変更に伴う発掘調査の期間中に、整備委員の先生に現場指導をいただいた。

#### 横須賀城跡整備委員（敬称略）

- |    |       |               |
|----|-------|---------------|
| 会長 | 斎藤 忠  | （大正大学名誉教授）    |
| 委員 | 小和田哲男 | （静岡大学教授）      |
| 同  | 高瀬 要一 | （奈良国立文化財研究所）  |
| 同  | 戸塚 康雄 | （大須賀町議会議長）    |
| 同  | 山下 繁  | （大須賀町議会第1委員長） |
| 同  | 土屋 廣重 | （大須賀町議会地元議員）  |
| 同  | 松浦源一  | （地主・地元）       |
| 同  | 桑原 武  | （町文化財保護審議会長）  |

但し平成5年2月31日付けで次のとおり一部委員の交代があった。

新委嘱委員 大場辰男（大須賀町議会議長）鈴木政吉（大須賀町議会第1委員長）

内藤澄夫（地元議員）

前任委員 戸塚康雄 山下 繁

## 第6節 史跡の現状変更

平成3年度	公園説明施設整備	1件
	住宅建設	1件
	住宅増築	1件
	住宅倉庫の建設	1件
平成4年度	発掘調査	1件
	資材置場建設	1件

以上の申請の内、住宅建設と住宅増築それぞれ1件について事前に発掘調査を実施した。その結果、西側の外堀へ続く法面と、石組の井戸枠状遺構を検出した。



第2図 横須賀城跡位置図

## 第2章 発掘調査の概要

### 第1節 調査に至る経緯経過

#### 1. 調査に至る経緯

今回の発掘調査は城跡整備委員会での協議により計画決定された本丸前の復原環境整備事業の資料を得る事を主な目的としておこなわれた。この部分の整備の目玉は本丸前の大石垣の復原と前面の平坦に想定される櫓門跡の復原整備である。発掘調査もこれらの遺構の検出を目標としておこなった。

#### 2. 調査体制

調査主体	大須賀町教育委員会
調査指導	斎藤 忠 (大正大学名誉教授)
	小和田哲男 (静岡大学教授)
	高瀬 要一 (奈良国立文化財研究所)
指導機関	文化庁
	静岡県教育委員会文化課
調査事務	大須賀町教育委員会事務局
平成3年度	教育長 金原與四郎、事務局長 大久保忠彦、派遣社会教育主事佐々木文雄 社会教育係長 大石武夫、主査 杉山英二、主事 大場静昌、平野智久 社会教育指導員 山口治、主査 木佐森道弘 (調査担当)
平成4年度	教育長 金原與四郎・事務局長 大久保忠彦、派遣社会教育主事山口守 社会教育係長 大石武夫、主査 杉山英二、名倉宏昭、主事 平野智久 社会教育指導員 稲崎信子 主査 木佐森道弘 (調査担当)

#### 3. 調査の経過

平成3年度は年度も終りに近い1月末からの現場作業開始となった。

平成4年度の現場作業は9月末から開始した。

現場調査の概要是以下のとおりである。

#### 調査日誌抄

##### 平成3年度

- 平成4年1月27日 • 作業用具搬入。
- " 1月28日 • 試掘トレーニング設定、調査開始。
- " 2月3日 • 本丸突出部西斜面の石垣を検出した。  
• 東の石垣前で宝暦5年の銘が入った平瓦が出土。

- " 2月4日 ・重機による掘削作業。
- " 2月10日 ・整備委員の小和田先生による現地指導。東西両コーナーに想定される上り道の検出等についてご教示いただいた。
- " 2月21日 ・本丸前石垣の東側コーナー部の検出作業をおこなう。途中で南へ折れる石垣根石列と青色粘土で埋め立てられた石垣根石列を検出した。
- " 2月24日 ・西の丸東斜面下の石積みの南端の掘削
- " 2月28日 ・西の丸東斜面下の石積みの北端が東へ折れて、櫓門跡平坦面の西側コーナーを形づくる事がわかった。
  - ・上記の石積みの南側に土留めをつくる。
- " 3月2日 ・上記の石積みが南側で途切れる事を確認した。
- " 3月21日 ・整備委員の小和田先生による現地指導。
- " 3月23日 ・本丸下の石垣根石列の続き検出する。
- " 3月27日 ・横須賀城跡整備委員会を開催。現場指導もいただいた。
- " 3月31日 ・現場作業終了。

平成4年度

- 平成4年9月9日 ・重機による排土作業開始。
- " 9月21日 ・手作業による作業開始。
  - ・東側突出部分の先端で方形石積み遺構を検出。
- " 9月24日 ・方形石積遺構内の瓦廃棄状態写真撮影。
- " 9月28日 ・櫓門跡平坦面の重機による表土排除作業。
- " 10月7日 ・東側突出部分の西北隅で石積遺構と石列状遺構を検出した。
- " 10月14日 ・東側突出部分の東側斜面にトレンチを3ヶ所設定し掘削。
- " 10月16日 ・方形石積遺構写真撮影。
- " 11月11日 ・櫓門推定地の前斜面東隅で暗渠状の溝の石列を検出。
- " 11月19日 ・上り道状の石積、塙基礎石列の写真撮影。
- " 11月25日 ・東側突出部分の完掘写真撮影。
- " 12月4日 ・櫓門前西側の石垣検出。
  - ・西の丸東斜面下のトレンチでピットと方形の不明土坑を検出、天目茶碗炭化物、カワラケ等が出土した。
  - ・整備委員小和田先生、静岡県教育委員会文化課職員、現地指導。
- " 12月17日 ・櫓門前の西側石垣が北端で東へ折れる事を確認した。これにより西側コーナーが検出できた。
  - ・櫓門前の東側の石垣を検出。
- " 12月22日 ・櫓門前の東側石垣が北端で西へ折れ、西側の石垣方向へ続いている事を確認した。これにより東側コーナーが確認できた。

- " 12月24日 • 平成4年仕事納め。
- " 1月11日 • 平成5年仕事初め。
- " 1月12日 • 檜門推定地直下で東西方向に並ぶ石列を検出した。  
• 檜門の西側端推定地付近で南北方向の石列を検出。
- " 2月4日 • 檜門の入口推定地のスロープ状部分を掘削、瓦礫まりを検出した。  
• 同スロープ東側（東側突出部分西斜面）石垣検出。
- " 2月5日 • 檜門前の石垣の写真撮影。
- " 2月24日 • スロープの東側斜面の南ではっきりとした石垣の根石列を検出した。
- " 2月26日 • 横須賀城跡整備委員会を開催する。斎藤会長以下各委員から現地にて指導を受けた。
- " 3月13日 • 横須賀城跡発掘調査現地説明会開催、参加者300名程。
- " 3月23日 • 現場作業、本日で終了。
- " 3月26日 • 文化庁の田中調査官の現地指導をいただいた。

## 第2節 調査の方法

発掘区は、国家座標に合わせ、また、10mの方眼を1グリッドとして設定した。グリッドの呼称は前年度までの呼称にならった。ただし、Aラインより西については頭にWを冠し、呼ぶ事とした。

- ・本丸前斜面 重機の使用が困難な傾斜地であるため人力による作業を主におこなった。
- ・本丸突出部西斜面 全体が傾斜地で途中に巾の狭い平坦面がある。重機による作業が困難なため人力による作業を主におこなった。
- ・本丸下の平坦面 本丸前の櫓門跡平坦面およびその前面部分。平坦面と低い斜面であり、重機による表土排除作業をおこない、その後、手作業による遺構の検出作業および写真撮影、実測作業などをおこなった。

現場作業終了後は、平成5年度の補足調査と復原整備事業とのからみから、ビニールシートによる被覆保護をして、当分の間、置く事とした。

## 第3節 遺構について

### 1. 本丸前斜面東側コーナー上部上り道状遺構（遺構01）

国立国会図書館所蔵の横須賀城跡の古絵図によると、本丸下の櫓門のある平坦面から、本丸へ上がる上り道として、3ヶ所の上り道が描かれている。そのうちの一本がこの部分にあたることから、この検出を最大の目標にすべて遺構検出をおこなった。なかなかそれらしい遺構の検出がなされなかつたが、平成3年度の調査で、上り道状の遺構が検出された。遺構は小笠山疊層中に産出する丸砾を使って作られている。根石は丸砾の長い方向の側面、あるいは、長い方向の扁平な面を横に使って作られている。上段部分の石垣は長軸方向を奥に使い、短い面が外側に出るよ

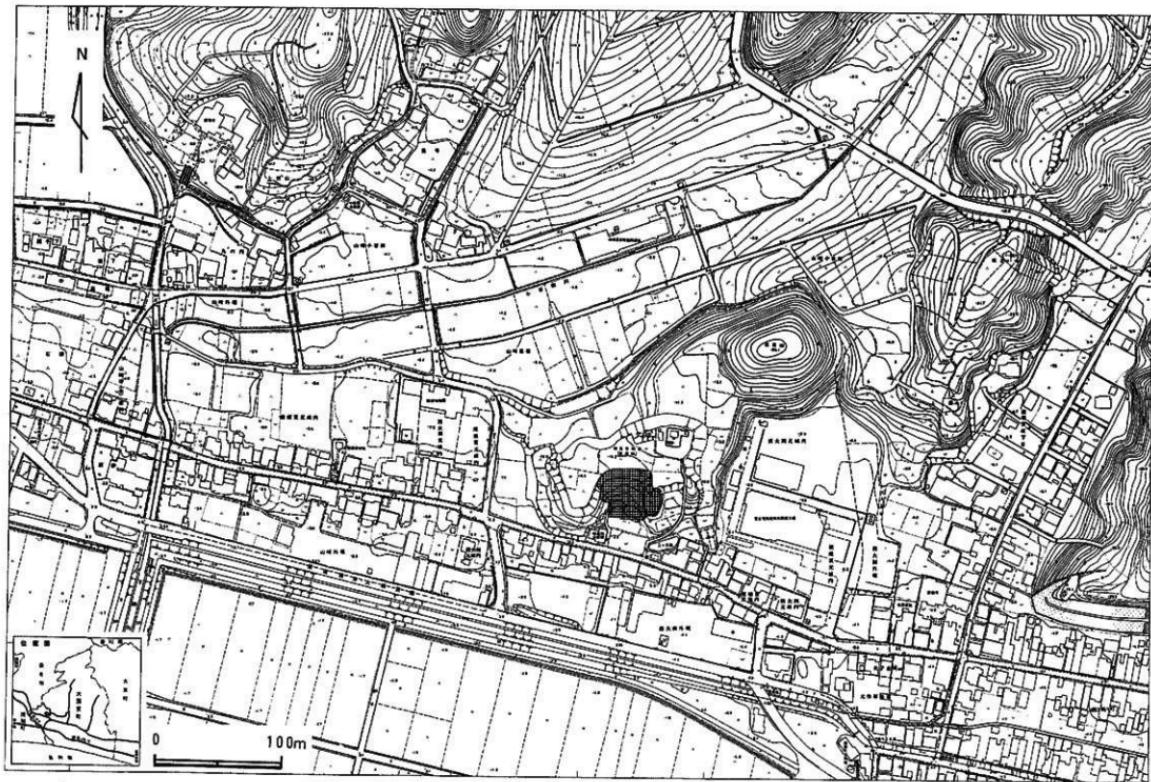
うに積まれている。また、細長い丸蹠の短い面を切断して、直線的な面を作り、この面が表側に出るように積んだものが一部みられる。

石積みの南面は、直線的にきれいに掘い、上り道状の遺構の南側を区切る土留めの石積みとして機能していたと考えられる。石積みは高い部分で3段あるいは4段の石積みが残存していて、西側で2段あるいは1段の掘え石になる。東側の2段目以上は短い面が表に出るように積まれているが、西側では2段めの石積みも長い面が表に出るように横向きに積まれている。この事からもこの石積みが東で高く、西に向かい次第に低くなるように積まれていたと考えられ、この石積みの北側の上面が西から東へ上がる上り道状のスロープを形づくる事がわかる。以上のとおり、この石積みが形づくる上り道状遺構が、櫓門平坦面から本丸へ上がる上り道の最上段の部分にあたると考えられる。石積みが形作る上り道は、スロープ状の上り坂道、あるいは階段状の構造が考えられるが、スロープとしては少し傾斜が急であり、階段状の構造も十分考えられる。斜面に拳大の礫が帶状に集中する部分が二箇所みられ、階段の蹴上の一歩とも考えられるが、これが蹴上とすると少し高過ぎるとの指摘もある。

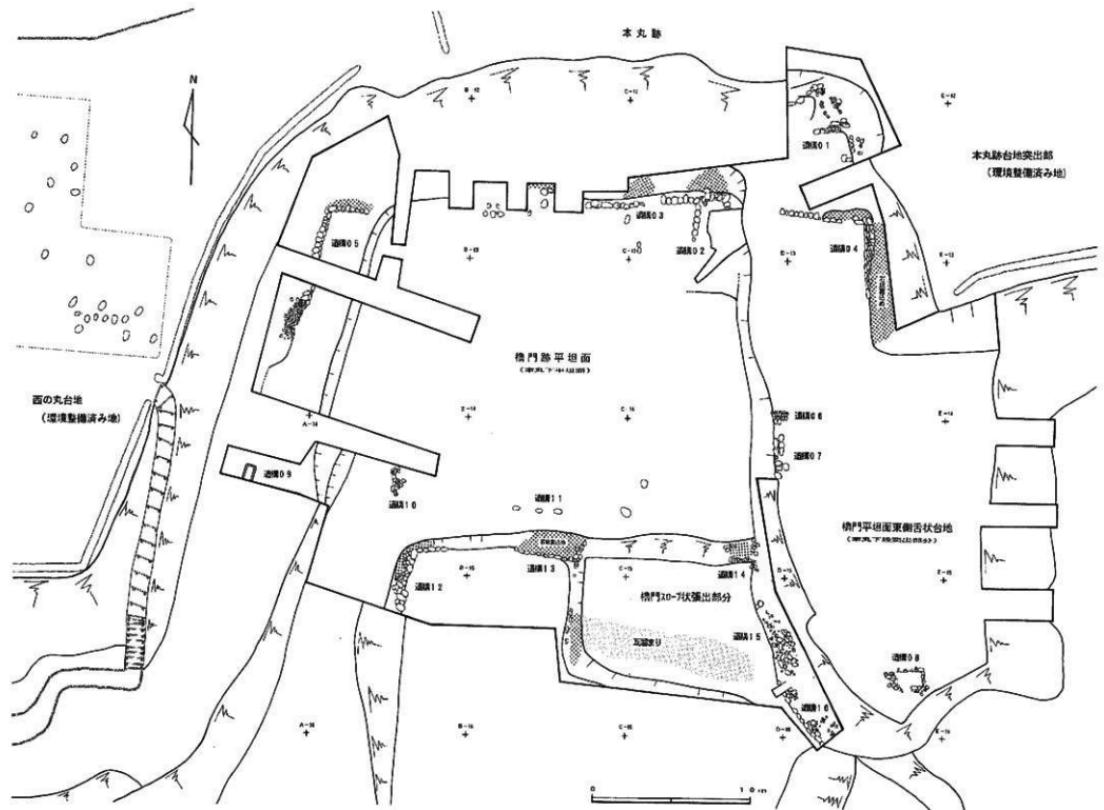
上り道の巾は平成元年度に検出された石垣から計ると2m10cm、北側端の側溝状の石列から計ると2m90cmとなる。上り道の西側には直径5cm程の扁平な玉砂利か敷かれたスロープがあり、西へ向かって下がり、平成元年度に検出された本丸前の上段石垣前のテラス状平坦面に続いている。この経路が櫓門の平坦面から本丸へ上がる東側の上り道の経路になると考えられる。

## 2. 櫓門平坦面（本丸下）東北コーナー部石列（遺構02）

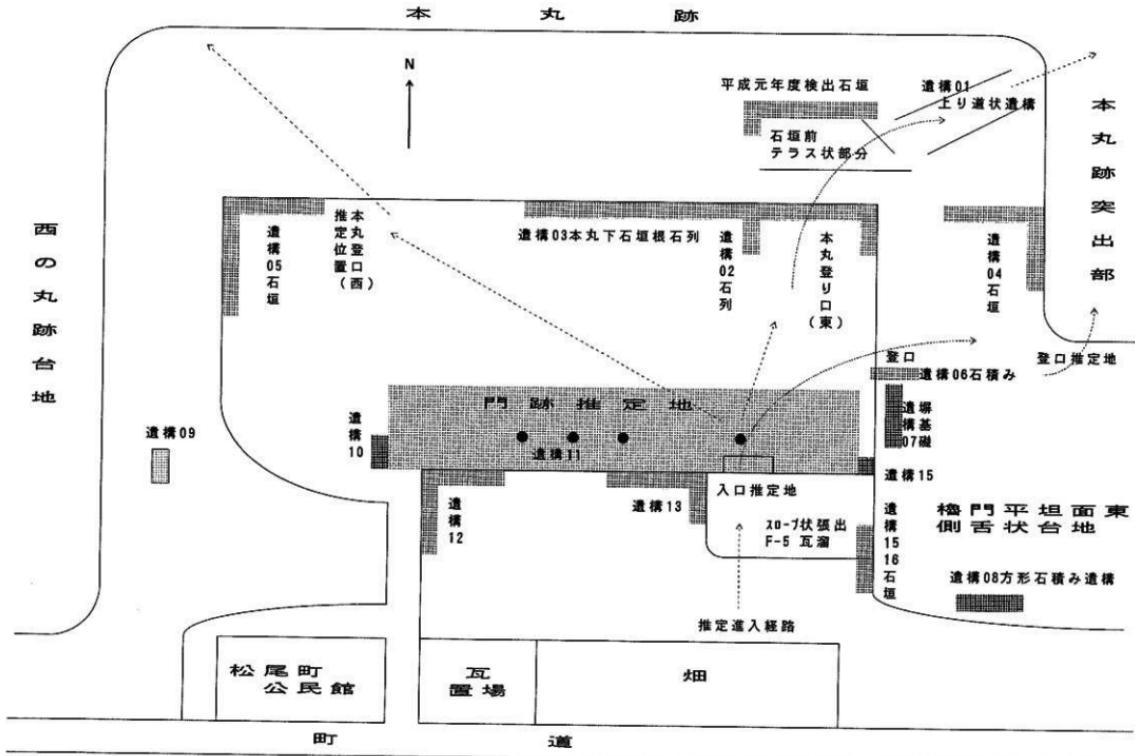
本丸前の高い石垣の根石列と考えられる石列が、斜面の下場ラインに沿って東西に検出されている。根石列の東端は南へ折れて東コーナーを作り、新旧2ヶ所の屈曲が見られる。奥側（東側）のコーナーは本丸下の根石列がきれいに南にカーブして形作られている。また、根石列の内側にあたる斜面には、拳大のそろった無数の丸蹠が斜面に張りつくように検出されている。この丸蹠は石垣の裏込めの栗石と考えられ、この石垣が高く積まれていた事を示している。栗石は、現状では根石列の面から約2m60cmの高さ（平成元年度に検出された上段石垣前のテラス状平坦面の高さまで分布している）また、注目すべきは、この栗石と石垣根石列が青色粘土によって埋め立てられている事である。ある時期に古い方のコーナーが機能を失い、青色粘土によって埋め立てられ、新たにその西側に本丸下の石垣に直交するような形で石垣が作られたと考えられる。この石垣も根石列が残るのみであり、本丸前の石垣根石列から南へ2m30cmほどの長さが残る。長径35cmほどの丸蹠の短い方の側面が西側に出るように据えられている。この根石列の形状からすると、高い石垣ではなかったと考えられる。また、東側に堆積する青色粘土の埋め立て土層は、この根石列に平行する形で（根石列の西側側面から60cm）直線的に断ち切れている。しかもこの粘土層は垂直に近い角度できれいに断ち切っていた事からすれば、根石列が低いながらも石垣を形作って、青色粘土の埋め立て土層の西側の土留めの石垣を成していたのではないかと考えられる。青色粘土の埋め立ての時期ははっきりしないが、埋め立て土の下層に瓦片がふくまれている事から、今後、時期が特定できる可能性が考えられる。



第3図 発掘調査区域図



第4図 造構全体図



埋め立て土は青色粘土と赤土が層状に堆積している事から、ただ単に古い時期の石垣が破棄され埋め立てられと考えるよりも、根石列と、それによる石垣の存在を加味して考えれば、何らかの遺構を形成するための埋め立てと考えたい。その遺構の性格は、櫓門の平坦面から本丸へ上る3本の上り道のうちの東側コーナーの上り道に關係する埋め立て土層と、その石垣と考えれば、埋め立て土の上面がスロープあるいは階段状の上り道を成していたと考えられる。その時考えられる経路は、櫓門跡平坦面から、この青色粘土上の上り道をまっすぐ北側に上り、本丸前の上段石垣前の平坦面に至りここで向きを右手（東）に替えて、前に述べたスロープ状の上り道を東へ上がり、本丸へ至る経路が考えられる。

### 3. 本丸下（南斜面）石垣根石列（遺構03）

国立国会図書館所蔵の古絵図によると、この部分には櫓門の平坦面から本丸の平坦面に達する高い石垣が描かれている。したがって今回はその検出を期待して調査をおこなった。

平成元年度のこの部分の調査で、斜面の下場ラインに沿って、東西方向に据えられた石列を検出している。この時の調査は巾2mほどのトレーナーを入れる調査であったが、なお東西方向に続いている事から、絵図に描かれている高い石垣の根石列であると判断していた。今回は本丸の下場部分のほぼ全体について掘削し、遺構検出をおこない、この斜面のほぼ東半について（東側屈折部分から約9m）根石列が検出できた。

前に述べたとおり古絵図にはこの部分に、櫓門の平坦面から本丸に達する高い石垣が描かれている。現状ではこの間の比高が約8mある。しかし、丸礎をこの高さまで空積みで積む事は技術的に難しく、構造的にも持ちこたえられないとの事である。この事からすれば絵図では櫓門の平坦面から本丸平坦面まで一気に積んであるよう描かれているが、実際は、中間ぐらいまで石垣を積み、それから上は土の斜面であったか、あるいは、この中間部でいったん平坦面を作り、更にこの平坦面から新に積むような上下2段の石垣ではなかったかと考えられる。実際に東側部分では上段と下段、2段に分けて積まれていた。このように2段に積む構造であれば、下の平坦面から見上げた時、石垣が途切れなく一様に積まれているように見えたと考えられる。したがって絵図でも一様に積んだ石垣のように描くのではないかと考えられる。この石垣は中間部分までとしても、約3m50cmの高さがある高い石垣であるが、現状は根石列と一部に2段目の石が残るのみである。石垣の根石はすべて丸礎であり、長径50cmほどの丸礎の偏平な面が上面になるように据えられている。2段目以上も同じような丸礎を積み上げて作られていたと考えられる。このように丸礎積みの石垣である事から、非常に崩れやすく、横須賀藩の記録でも度々崩壊した事が記録されている。特に明治維新直前の安政元年(1854)の安政東海大地震の被害状況報告を幕府に報告した記録によれば、城内本丸の分として「一、長陣門破損、一、天守破損傾、一、御用米蔵六棟潰、一、武器藏壊潰」等々各建物の被害と共に「一、石垣不残崩、一、圍塀不残倒」と悲惨な状況が報告されている。建物の被害もさることながら、圍塀と石垣が残らず倒壊崩落したと言うこの記録は、安政東海大地震の規模の大きさとともに、塙や石垣が、倒壊、崩落しやすい構造だった事が良く伺える。特に石垣については極端に言えばボールを積み上げたような不安定な石垣

であり一般的な切り石積みの石垣と違いそれぞれの石を組んで崩壊に耐えうる強い構造が作りにくい。したがって積むにもむつかしく、尚かつ、災害にも弱かったと考えられる。安政東海大地震はマグニチュード8.4 の巨大地震であり、この時に本丸についた石垣が残らず崩落したとの記述は 事実を述べていると考えられる。地震後の復興の記録はほとんど残っていないので詳しい事はわからないがこの地震では城内城外ともに甚大な被害を被り、復興には莫大な費用と時間が必要であったと考えられる。また、安政2年には江戸においても大地震があり江戸の藩邸にも被害が出たのではないかと推察される。このように度重なる災害と世情不安な当時の状況から、藩の財政も相当逼迫していたと考えられる。このような当時の状況からすれば、城内の石垣等の修理がどの程度完全に行われたのか疑問がある。その後十数年をへて明治維新の混乱期を迎、明治元年徳川家達が駿府城に入り駿府藩が成立すると、横須賀藩は安房国花房に転封となった。そして明治2年にはついに横須賀城は廃城となり、明治6年には建物、石垣、立木等に至るまで民間に払下げられた。このように幕末の横須賀城は御難続きで、相当荒廃していたと想像される。そして明治維新の混乱と、廃城払下げにより城の荒廃は極に達した。民間への払下げは競走入札によりおこなわれた。安政の大地震後ある程度積み直されたであろう石垣も、払下げで全て持ち去られ、根石列を残すのみとなった。現代人の感覚では石垣や立木までもらっていって何に利用するのだろうと思うのだが、当時は建築資材としてこのような丸礎も利用価値があったようで、実際、町内や近隣町の民家で、城の石を貰ってきて庭石や建物の礎石に使っているとの話しを良く聞く。このようなありさまであるから、根石だけでも残されていた事も良しとしなければならないのかもしれない。根石が残されることは抜取が難しい事が主からと思うが、あるいは石垣跡ぐらいは後世に残したいとの旧領民の心が働いたのかも知れない。

#### 4. 本丸突出部西側斜面石垣（遺構04）

今までの発掘調査で検出された石垣の内、最も残りの良いものの一つである。平成元年度の発掘調査で検出された本丸前斜面の上段の石垣と積み方が同じである。その特長は扁平な丸礎を平面に積むのではなく、扁平な丸礎の平な面が上向きになり短い方の側面が外側（表面）に出るように積んでいる。尚かつ、扁平な石を水平に据えるのではなく、奥側が下、外側の面が上手にくるように据えている。つまり、石を斜め上方から差し込むように斜めに積んでいるわけで、松笠状あるいは魚の鱗状とでも表現したら良いだろうか。この石垣のように斜めに差し込むように積み上げる方法では構造的にも弱く、一般的でなく珍しい積み方である。石垣は最も残りの良い部分で5段積みまで残っている。根石はやや大ぶりの石（扁平な丸礎の平らな面を表に出して横向きに据えている）扁平な面を表に出す据え方では構造的に弱いように思うが、前述した平成元年度の調査で検出された石垣も同じ据え方、積み方がなされている。石垣の根石は地山あるいはそれに近い黄褐色の砂礎層上に据えられていて、根石が動かないように根元には拳よりやや小ぶりの小礎や割石が挿み込まれている。

石垣は南北方向に4m 80cmが確認できる。石垣の前庭部は水平でなく、北から南へ、東から西へ（石垣の根元から前方へ）傾斜している。この事から当初はこの石垣前庭部が南から北に上が

る道の一部になっているのではないかと考えた。しかし、ただ単に南から北に傾斜しているのではなく、東西方向にも傾斜している事を考えあわせれば上り道と単純に考える事は無理がある。また、石垣の北端が西側へ折れ、石垣の前庭部は北側で閉じている事からも、上り道の可能性は低い。ただし、西側へ屈折した石垣根石列は裏込めの状態や北側の上り道状石積みとの関係等を考えれば高い石垣だったとは考えられない。

先に述べたとおり石垣は5段まで残り、基盤から1m25cmの高さが残っているが、当時は本丸の平坦面近くまで積まれていたと考えられる。ちなみに石垣の基盤から本丸平坦面まで約4m50cmの高さがある。国立国会図書館所蔵の古絵図には、この石垣とその前の前庭状の平坦面は描かれておらず、本丸前の石垣と同じように櫓門の平坦面から一気に本丸平坦に達する高い石垣として描かれている。この事からすれば、この絵図が描かれた時点では本丸の突出部が現在よりももっと西側まで巾広くあって、その西側斜面には櫓門の平坦面から本丸平坦面にまで達する高い石垣があったが、地震等の災害により崩壊し、その後、復元不可能だったので現在のように本丸突出部の巾を狭めて、石垣も奥（東）側に引っ込めて新たに積まれたのではないかと考えられる。この時に石垣の前庭部もできあがったと考えられる。

#### 5. 櫓門平坦面西北コーナー部分石垣（遺構05）

国立国会図書館所蔵の古絵図では、この部分に櫓門の平坦から本丸へ上の西の上り道が描かれている。先述の東側コーナーと対をなすものである。整備計画でも上り道の整備は重要な部分を占めている事から、今回の調査の重点の一つとして捉えた。しかし、残念ながら上り道は検出できなかった。この部分は台風等で度々崩壊を繰り返しており、これにより上り道の造構も破壊されてしまったのではないかと考えられる。

今回の調査では櫓門平坦面の西側斜面（西の丸東側斜面）で、低い石垣（石積み列）が検出された、この石垣は現状では二段が検出されているが、裏込めの状態などからすると更に上部に2段ほどの石積みが考えられる。古絵図ではここに石垣が描かれていない事などを加味して考えれば、石垣と言うよりも西の丸の東側斜面の崩落を防ぐための4段ほどの石積みであったと考えられる。つぎに石積みの方法を述べる。根石は長径45cm～60cmほどの大きな丸礎の平らな面を下方にし、長い方の側面が表（東側）に出るように据えてある。二段目は石の方向が変わり短い方の側面が表に出るように積んでいる。石と石の間の空間には小礎や割り石が詰められている。根石は地山あるいはそれに近い黄褐色の砂礎層上に据えられている。しかし礎等で固定はされていない、石の積み方は先述した石垣とは明らかに異なる。この石積みの前面は平坦になっていて塀に使われた平瓦が平坦面に直接廃棄されたような形で検出されている。おそらく西の丸の匂い塀の瓦が上方から落ち、捨てられた状態と考えられる。また、この石積みと瓦を覆う形で多量の拳大の礎が体積していた。石積みの裏込めの栗石に使われていた小礎などであると考えられる。この石積みは南側では裏込めの栗石のみとなり、途切れている、南側で次第に低くなり終わっていたと考えられる。北端からの長さは、石積みが残る部分までが6m、その続きと考えられる栗石までふくめると8m50cmの長さが残る。石積みの北端は本丸前の斜面へぶつかったところで東へ屈

曲し、櫓門の平坦面（本丸前平坦面）の北西隅のコーナーを形作っている。屈曲した東方向への石積みは、屈曲部分から2m35cmで途切れているが、これを更に延長すると先述した本丸下の石垣根石列とはば直線上に並び、東側コーナーと対をなし櫓門の平坦面の区画をあきらかにしている。また、東へ屈曲し本丸下の石垣根石列上に連なるこの石積みは、東へ向かって下がる形で傾斜して積まれている。また石積みの内側（北側の本丸前斜面部分）に栗石が分布している。（現状の石積みは基盤から50cm～60cm栗石もふくめると80cm）先にこの部分には本丸へ上る上り道が想定されるが、遺構は検出されていないと述べたが、本丸下の石垣根石列と、このコーナー部の石垣とが途切れた部分に想定してよいと考えられる。特に、石垣根石列が途切れた部分の東寄り部分に南北に掘えられた石列があり、これが上り道の東側を区切る石列になってくる可能性を考えられる。

#### 櫓門平坦面東側舌状台地（本丸下段突出部分）

櫓門跡平坦面の東側にあたり、本丸の平坦面と櫓門跡平坦面との間の中段で、本丸から舌状に南に張り出した一段高い台地状の地形をなす。西の丸と対をなして、櫓門の平坦面を東西から閉じている。絵図ではこの平坦面には建物等は描かれおらず、西、南、東の三方を囲い塀が取り巻き、西側櫓門より北側には石垣があるが、それより南側の西斜面と東側斜面には石垣は描かれていない、また櫓門から本丸へ上る三本の上り道のうち、櫓門をくぐってすぐ東へあがる上り道が描かれている。したがって、上り道や塀跡などの検出を目標に調査をおこなった。

#### 6. 舌状台地西縁石積み（遺構06）

石垣などに使われている石より少し小ぶりで偏平でない石を積んで作られている石積み遺構である。二段の石積みが残り、東西の長さ1m20cm南北60cmの巾の石積みで、石と石の間の空間は小石や粘土等で詰められていない。石積みは遺構の北側の面を意識して作られている。石の積み方は雑然とした感じを受けるが、北側のへりが東西に揃うように積まれていて、二段目の石は一段目より奥（南側）に10cmほどずらして積まれている。この石積みの北側を面としてとらえると舌状台地の西側の裾ラインに対し、ほぼ直行するよう北側に面を作り、なおかつ上側が南へやや傾いた形になる。以上のようにこの遺構は北側から見る事を意識し、北側にある遺構の南の裾を区切るために積まれた遺構である事はあきらかである。また、石積みは西側の斜面方向に若干下がる形で作られている。このような遺構の状況と、位置、絵図を参考にこの遺構の性格を考えると、西側の櫓門の平坦面から舌状台地へ上がる上り道の南へりを区切り、区画する石積みではないかと考えられる。

石積みの基盤とその西側の櫓門の平坦面との高低差は2m50cmほどある。当時は石積みの北側に西へ張り出す傾斜面があり、スロープあるいは階段状の上り道になっていたと考えられる。現状では石積みの西側はほぼ垂直の土手となっているだけである。永年の耕作により削り取られてしまったと考えられる。

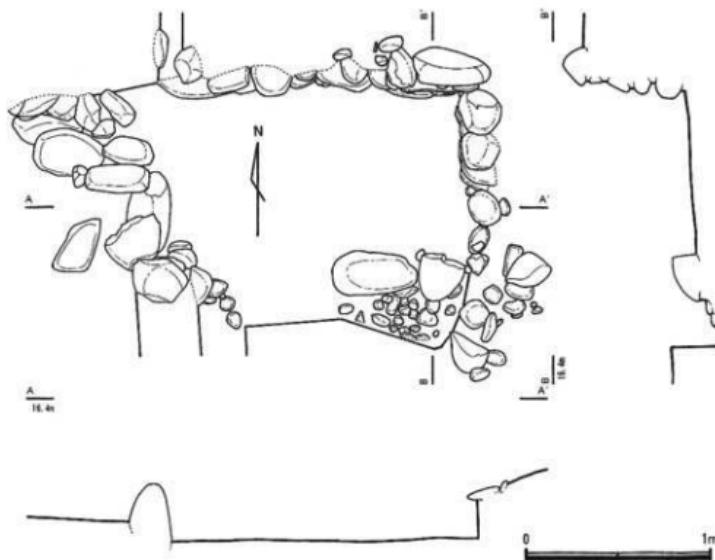
## 7. 囲い塀基礎石列 (遺構 07)

前に述べた石積み遺構から南に接続する形で、舌状台地の平坦面の縁沿いに石列が作られている。部分的に途切れていますが、全体で3m20cmの長さが確認できます。偏平な丸砾の偏平な面が上になるように、また石の長軸方向が石列の方向に対して沿うように（平坦面の縁に対しても）据えて作られています。ただし南端の三個の石だけは、石列の方向に対し、直行するように据えられています。石列は二列に据えられ、石と石の間の目地は小砾や割れ石で詰められています。また二列のうちの平坦面の裾側（西側）の石列は内側（東側）より5cm~15cmほど下がっている。

この部分は上り道が推定される部分にあたり、尚かつ二列になった石列の西側が下がった形から当初は、階段状の上り道の石段の最上段二段が残っているのかと考えた。しかし、その位置的造構の状況から考えると、上り道の石積みから平坦面の裾沿いに巡っていた囲い塀の基礎石の石列と考えたい。ただし、国立国会図書館の絵図では囲い塀は櫓門の東端に付いた形で始まって舌状台地の南側、東側、を囲むように描かれていてこの部分には、上り道の南の縁から続く石垣があるだけで囲い塀は描かれていない。

## 8. 方形石積み遺構 (遺構 08)

舌状に南に張り出した台地状の平坦面の南端で検出された遺構で、石積みにより内寸で東西1m60cm南北85cmの長方形の遺構が作られています。遺構内の床面はほぼ平らで、北側面で5段の石



第6図 方形石積み遺構 (遺構 08) 実測図

積みが残り床面から上場まで68cmの高さが（深さ）がある。北東のコーナーについて北面と、東面の北半の残りが良く、南面はほとんど残っていない。北東のコーナーは、ほぼ直角に南に折れている。東南コーナーは残りが悪いが南面の根石の端の二個の据え石が残っているのでなんとか確認できる。北西コーナーも残りは良くないがほぼ特定できる。西南コーナーは南面の石積みの残りが悪いので特定しにくいが、西面のラインと南面の残存する根石列の延長線上の交差する部分にコーナーが推定できる。

石積みの方法は極めて特長的である長径35cmぐらいの長い石は、長い方の側面が表（遺構の内面）に出るように据え、径15cmぐらいの小ぶりの石は使い方が様々である。この大小二種類の石を1段目は大ぶり、2段目は小ぶり、3段目は大ぶり、と各段で石の大きさが交互になるように積んでいる。（東北隅は顯著だが違う部分もある）また石と石との間の目地は土により詰められている。石積みの内面が形作る方形の遺構内からは、丸瓦と拳大の丸礎が廃棄された状態で出土している。遺構の性格ははっきりしないが、絵図では三方が囲い塀で囲まれた部分に当たり、死角地となっている。このような事を考えあわせれば廻の水を一時的に溜めて処理するような施設や、廻の溜などが考えられる。その場合、簡単な上屋が考えられる。

#### 9. 方形不明土坑（遺構 0 9）

西の丸東斜面下に位置する。長軸が南北方向（西の丸東斜面下場ラインに沿う）を向く用途不明の長方形をなす遺構である。遺構の性格は、はっきりしないが基盤となる地山は不透性の強い黄褐色の砂疊層で、水が溜まるとはける事が無い。したがって液体を溜めておくような用途が考えられるわけで、この事から遺構の性格を考えれば、天水井戸あるいは廻の溜のなどが考えられる。遺構の四周は北側は櫓門の西端から西の丸まで石壘状の石垣積みの土壘で閉じられている。東側と南側は櫓門の西側から南へ向い途中で西の丸の囲い塀へ接続する塀により閉じている。また、西側は西の丸の囲い塀で閉じている。このように絵図でみるとかぎり遺構の四周は閉じられていて死角となっている。この事からも、遺構の性格は廻や井戸のような普段は目につかない場所にあるべき施設である可能性が強く、形状からすれば井戸と言うより廻の溜の可能性が高いと考えられる。

#### 10. 櫓門推定地西端石列（遺構 1 0）

櫓門推定地の西端に位置する石列遺構で拳大から長さ30cmほどの長細い丸礎をつかい南北方向（櫓門の推定される奥行き方向に平行）に1m70cmほどの長さが残る。その位置と、石列の方向から考えると櫓門に関係する遺構で、櫓門の西端にあたる石列ではないかと考えられる。遺構の性格は櫓門の西端の壁を支える基礎石列などが考えられる。

#### 11. 櫓門推定地石列（遺構 1 1）

櫓門跡の推定地の中央部分に長径50cm～60cmほどの細長い丸礎が60cm～90cmの間隔でほぼ一直線上に並んでいる。石は長軸が石列の直線上に並ぶように据えられている。しかし、西側の一つと東側の一つだけが飛び離れ、尚かつ、その間には高低差があり、櫓門に関係した石列の可能性もあるが、一時代前の遺構に関連する石列の可能性が高い。

#### 12. 檜門下西側石垣 (遺構12)

櫛門跡の下の西側に位置する石垣で、南北方向に約4mの長さが残る。北端は櫛門推定地の下場に沿って東へ折れ、櫛門下(前)の西側コーナーを形成する。東へ折れた石垣は最下段の根石列しか残っていない。西側の石垣は残りの良い部分で、4段から5段積みの石垣が残っている。石の積み方は特長的である。北半は長径40cm~60cmの偏平な丸蹠の平らな面が表に出るように、また石の長軸が縦になるように長く立てて据えて作られている。北半は先述の石垣と同じように、下段は長軸を横向きにして、二段より上は上方から差し込むような形で作られている。石垣は極めて不安定な状態で、中央部が前方へ張り出し、崩壊寸前のようない状態である。周囲は地震などで崩壊し、かろうじて残ったのがこの部分であると考えられる。石垣の内側は拳大の丸蹠が分布しており裏込めの栗石と考えられる。

#### 13. 檜門下東側石垣 (遺構13)

櫛門下の東側に位置する石垣で、屈曲して東側コーナーを形づくり前述の石垣と対をなす。東西方向の石垣根石列は門の下場沿いにあって、これを西に延長すると前述した西側コーナーの石垣の東へ折れる根石列の延長線上にあたる。しかしその間の約4mは途切れている。門の下場の石垣根石列は1段目あるいは2段までしか残っていないが、コーナー部分は比較的良好残っていて、5段から6段目まで確認でき、櫛門の入口位置の推定材料となる。石の積み方は、根石となる最下段の石は偏平な面を表に出して横に据え、2段目以上は短い方の側面が表面に出る向きに据えている。今まで述べた石垣と違うのは石を斜め上方から差し込むように積むのではなく、ほぼ水平になるように積んでいる事である。これが一般的な積み方であり、構造的にもこの方が強い。東西の根石列は約4mの長さが残り、高さはコーナー部で1m70cmの高さまで残っている。裏込めの栗石は櫛門の平坦面まで分布しているので、この面まで石垣が積まれていた事は間違いない、また、櫛門の構造や入口の位置などから考えると現在の平坦面の高さより最大で2m以上更に高く積まれていたと考えられる。この石垣の上に更に櫛門があり入口部分が現状程度の高さで残り、門の入口を形作っていたと考えられる。南北方向の石垣は現状では途中で途切れるが3m80cmが残り1段あるいは2段が確認できる。内側の上部には拳大の丸蹠が無数分布しており裏込めの栗石と考えられる。したがって当時はこの斜面上まで石垣が積まれていたと考えられる。この斜面は南側から門の入り口へ入るためのスロープ状の張出部分を形作っている。石垣はそのスロープの西側を区画し、土留める石垣だったと考えられる。スロープの斜面にあわせ南から北にかけて除々に高くなるように積まれていたと考えられる。絵図にもそのそのような構造で描かれている。以上のとおり遺構12の石垣と遺構13の石垣が形成するコの字状の石垣は、絵図の描写と同じで旧状を良く残しており、今回の発掘調査の大きな成果の一つである。

#### 14. 門前スロープ状張出部分

櫛門跡の東側前面部分にあたるスロープ状の緩斜面で東西の巾11m南北の奥行き8mを計る。古絵図によるとこの張り出し部分に、櫛門の入り口前のスロープ状の進入路が描かれている。地形と絵図とが合致するので、期待して何回か精査をおこない遺構検出につとめたが、はっきりと

した入り口状の道は検出できなかった。しかし、南半部分からは多量の廃棄瓦が一面に出土している。北半は耕作で水平に削平されたため遺構が無くなっているが、南半は南にむけ餘々に下がっていることから削平のがれ、スロープ状の緩斜面を呈し、廃棄瓦が分布していると考えられる。また、廃棄瓦層の下面には青色粘土と玉砂利による整地層があり、門の入り口のスロープ状の上り道と考えられる。この廃棄瓦の上面にも黄褐色土の整地層がある事から、瓦層の下の青色粘土層がなす上り道より新しい時期のスロープと考えられる。古いスロープが廃され、上面に瓦が廃棄された時期は廃棄瓦の中に城主本多氏の家紋である立葵文の入った軒丸瓦が見られる事から、本多氏の入封した正保2年（1645年）を過らない事は確実である。なお、瓦の大部分は横須賀城の瓦の中でも古手の瓦が占めている事から、築城当時に作られた門が本多氏の時代、あるいはその直後ぐらに倒壊し、その瓦が門の前面のスロープ上に廃棄され、その後、黄褐色土で整地されて新しいスロープがその上面に形成されたと考えられる。その時期を大胆に推測すれば城主が本多氏から西尾氏に変わった直後の宝永4年（1600年）の宝永の大地震等が考えられる。なお、前述した石垣の栗石はこの瓦層の上に乗るような形でみられるので、土留めの石垣は瓦の廃棄された時点に作り直された可能性が高い。また、古い時期の門は瓦が分布するこのスロープ状の平坦面上にあり、その後の修復で絵図のようにその後方（北側）に移り大規模な櫓門となったとの考え方もある。

#### 15. 排水溝状遺構（遺構14）

櫓門の平坦面とその前面の平坦面との段差を作る南向きの法面の東端にある遺構で、長さ20cm～30cmほどの丸礫を使用している、石は丸礫だけではなく、丸礫に一面以上のカット面を作った丸礫を使って作られている。11個ほどの礫を法面の下塙ラインに平行に、全体で1m25cmの長さに据えて作られている。石列は一列のみで、あまりしっかりした石列とは思えない、位置的には法面の下塙ライン面から約40cmの高さに据えられている、また、櫓門平坦面からは90cm程度下がっている。下塙の巾90cm上場の巾1m80cmを計り底面は平らである。つまり断面形が台形を逆さまにした形をなす溝状の遺構である。基盤は、東側は地山層となり、西側は、下部は地山層、上部は青色粘土層となっている。北側にも溝が続いているが深さは20cm程しかなく、この部分で急激に下がっている。

遺構は東側の舌状台地の垂れ水を櫓門平坦面へ流下させないために、櫓門平坦面の東側裾部に作られた溝状遺構で、この石列状の遺構は溝を流下した垂れ水が、櫓門入り口状スロープ平坦面に落とす部分に作られた石列と考えられる。溝は礫と瓦片で埋め立てられているが、隙間無く非常に緻密である事からすると、ただ単に埋め立てられたのではないようにも考えられる。絵図によるとこの部分は櫓門の入り口の東側にあたり石垣積みがありその上に門の東端から東へ続く囲い塀が建っていた、したがってこの溝は人間が出入り出来ないような構造をした、たとえば木柵などで閉じられた溝や暗渠排水のような排水遺構が考えられる。

#### 16. 櫓門入口スロープ状張出東側石垣（遺構15）

櫓門前のスロープ状部分の東側斜面に分布する礫群で、石の大きさは30cm～40cm程の大きさが

あり、栗石にしては大きく、また積んだようにみえる事から石垣ではないかと考えられるが、石垣にしてはいさかか雑然としてお粗末である。したがって石垣の裏込めの栗石の可能性もある。なお、古絵図ではこの部分に石垣は見られない。

### 17. 石垣根石列（遺構 16）

前述した遺構の南側にあたり、櫓門前のスロープ状の張り出し部分の東端、東側の舌状大地の西側の下場ライン沿いに作られている石列で、石垣の根石列と考えられる。石は長径50cm程の丸礫を使い、扁平な面が表に出るように、斜面に沿うように、また上側が奥側へ傾いた形で据えられている。現状では全体で5mの長さが確認され、8個の根石が残る。一か所だけ二段目の石まで残っている。二段目の石も扁平な面が表にできるように積まれている。南側は調査の関係から途中で遺構検出を止めているが、なお南側に続いている。絵図ではこの部分のすぐ東側に東大手門から進入し、三日池の北側をとおって櫓門へ至る進入路と、小規模な門が描かれているので、今後この石垣の根石列の続きを門跡が検出される可能性が十分考えられる。なお絵図ではこの石垣は描かれていない。

## 第4節 遺物について

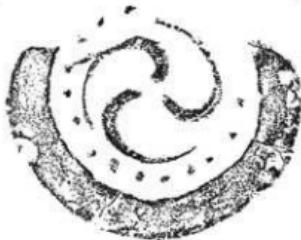
### 1. 軒丸瓦

1 内区に左巻きの三つ巴文、外区に連珠を配する軒丸瓦で瓦当上部の1/3ほどが欠けている。胎土は、砂質はそれほど強くなく、色調は灰白色、焼成は比較的良い。

2 瓦当文様は横須賀城の後半の城主である西尾氏（1682年～1686年）の家紋である櫛松文を付けた軒丸瓦である。櫛松文には櫛の歯が7本のものと、9本のものがあるが、これは7本歯である。瓦当は、離れ砂が顕著に付着する。胎土は砂質が強くなく、焼成は良好である。瓦当の側面は頭から尻方向になでがみられ、瓦当裏面は横方向のなで調整、周囲は縁どるようになでられている。瓦当の周囲の縁の角が狭く面取りしてある。瓦当部と丸瓦部との接合は瓦当部裏面に放射状に櫛目が顕著に残る。

3 2と同じく櫛松文が付く軒丸瓦である。胎土は砂質が非常に強く灰白色で焼成は良い。瓦当周囲は縦方向のなで調整、瓦当裏面は周囲をめぐるようになで調整され、丸瓦部の凸部は縦方向にへら調整がされている。瓦当部と丸瓦部との接合は瓦当の裏面の上端に横方向に櫛目がみられる。この瓦は2と同じ櫛松文を付ける瓦であるが、次の点で2とは異なっている。櫛の歯の本数が2は7本だが3は9本歯である。型範からの離脱方法は2は瓦当表面に離れ砂が付着、3は雲母粉が付着する。瓦当と丸瓦部の接合部の櫛目の方法は、2は放射状3は横方向、その他、文様の松部と櫛部の接触状態、松部の葉脈の表現方法など細部に違いがみられる。櫛松文については以前から7本歯が古く、9本歯の方が新しいと言われている。前述のとおり両者には幾つかの違いがみられ、時代差があるであろう事は間違いないと思われる。全体的な印象からは、やはり9本歯の方が新しい印象を受ける。特に、7本歯の瓦當には離れ砂が付着するのに対し、九本歯では雲母粉が付着する事は重要な点と考える。この瓦より古いと考えられる三巴文や立葵文が付い

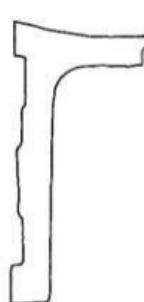
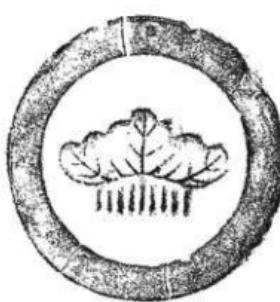
1



2



3



第7図 出土瓦拓影図 (1)

た軒丸瓦では離れ砂を使用している事を考えれば、技術的な流は離れ砂使用の方が古いと考えられ、7本歯はその流れをくむと考えられる。7本歯から9本歯に変わる時期に范型の離脱方法も離れ砂から雲母粉を使用した方法に変化したとも考えられる。そこで、過去の出土例を再点検したところ、9本歯の櫛松文で雲母粉の付着がみられず離れ砂のみが付着した軒丸瓦が若干みられた。また、離れ砂状の砂が顕著にみられ、さらに雲母粉の付着がみられるものもある。しかし、特に離れ砂のみの例はごく例外的にみられるだけであるから、9本歯に変化した初期には雲母粉使用が始まっておらず、その後移行期をへて雲母粉使用に移ったとも考えられる。この視点から今までの瓦を見てみると、軒平瓦、菊丸瓦などにもこの変化がみられる。特に、菊丸瓦については以前から陽刻菊丸瓦と陰刻菊丸瓦とは同時期に作られ、使用箇所の違いによって使い分けられていたとか、さまざまな説があるが、離れ砂の付着の点から見てみると、陰刻菊丸瓦は離れ砂使用、陽刻菊丸瓦は雲母粉使用ときれいに分けることができる。陰刻、陽刻とともに花弁の数、瓦当の直径、等々で数種類に分類でき、時期差も考えられるが、事、離れ砂の違いについては、はっきり分ける事ができる。この事は、前に述べた技術の変化をここに当てはめて考えれば、陰刻と陽刻とで時期が完全に二分される事になるが、はたしてそのように単純に区分し、結論づけて良いのか未だ疑問が残る、たとえば、建物の目立つ部分には雲母粉が付着した瓦を使用し、目立たない部分には、雲母に比べ容易に手に入る離れ砂使用の瓦で済ませた事も考えられるわけである。しかし、陰刻と陽刻でこのようにきれいに二分できる事は大変重要な事実である。今後の検討、研究により、櫛松文の歯数の変化と雲母粉使用の技術の変化を考えあわせ、その変化の時期等が特定出来れば、面白い結果が導きだされる可能性が高い。

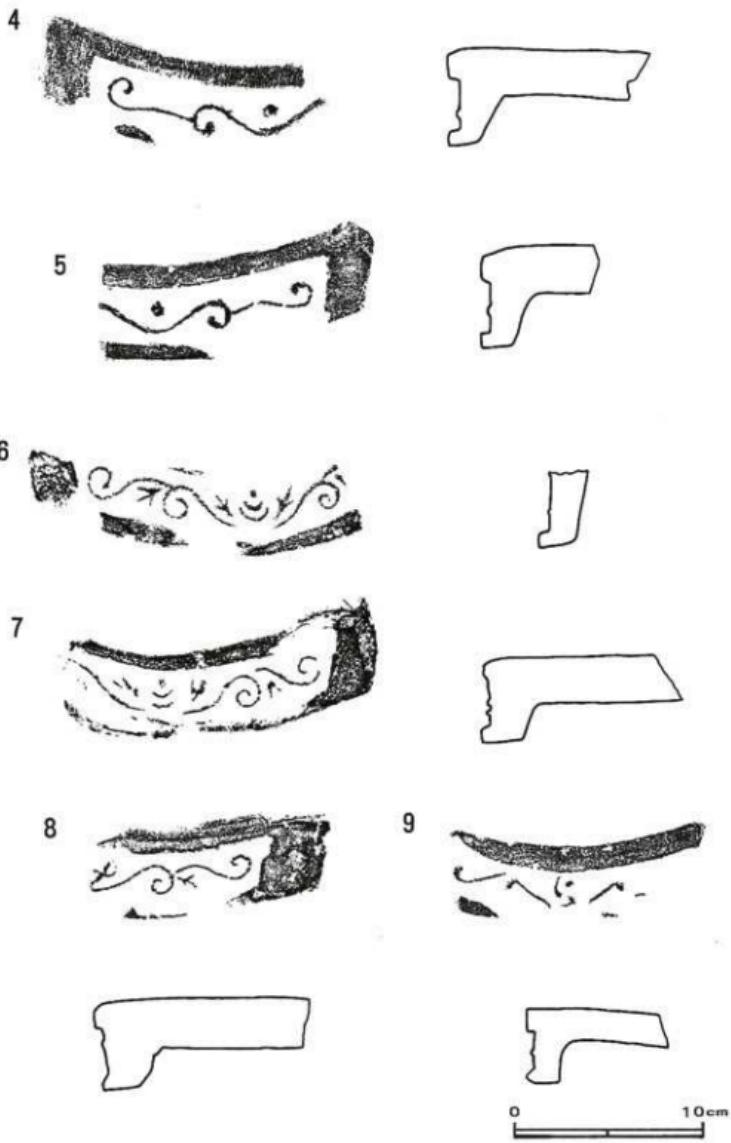
## 2. 軒平瓦

4 瓦当文様は中央に珠文を配した均整唐草文で唐草の線は太い。5と同じ文様である。中心飾りから右半のみが残る。胎土は瓦当部分と平瓦部分で異なる、瓦当部分は砂質が強く、平瓦部分は強くない、ただし、色調は同じ灰青色である。平瓦部分には離れ砂と思われる砂の付着がみられる。ただし平瓦部の凸凹面などに一様にみられる。平瓦部の厚みは24mm～25mmをはかる。瓦当上部はヘラ削りによって瓦当に向かって下がっている。

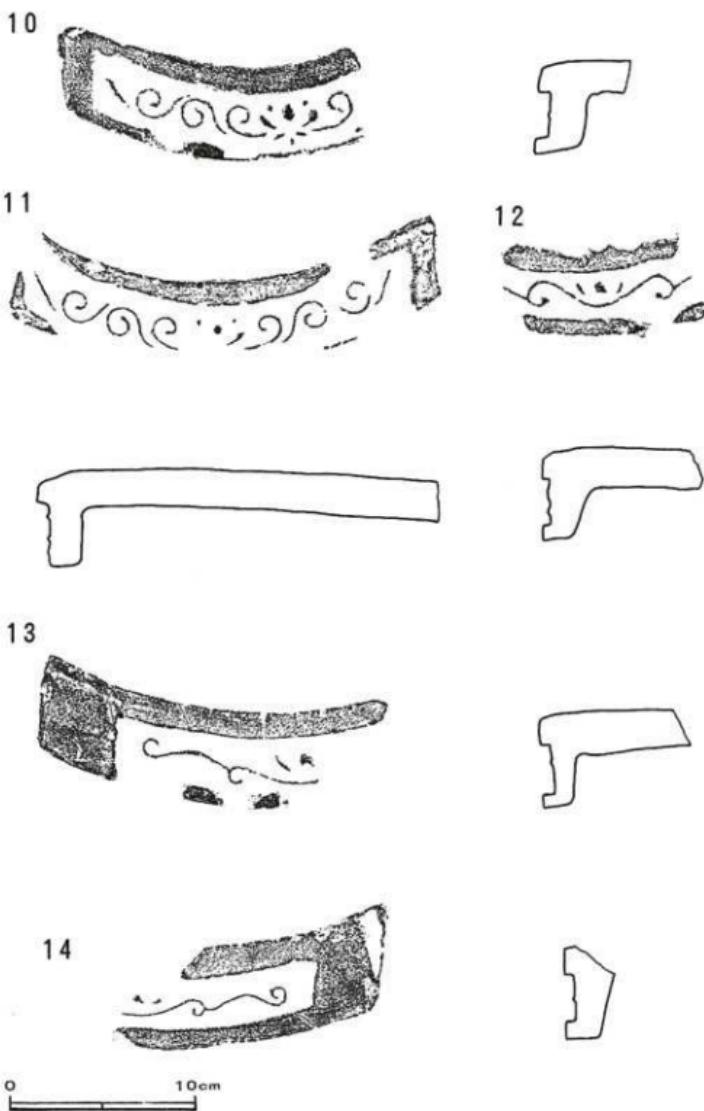
5 4と同じ文様をもつ軒平瓦で左半のみが残る。瓦当部の上端、平瓦部の頭部は4と同じく瓦当側に傾斜する形で横方向に削られている。胎土は砂質が強くなく灰白色で焼成は良好である。全体に横方向のなでがみられる。瓦当左周縁と平瓦部の凸部の一部には、縱方向のなでがみられる。離れ砂の付着はみられない。瓦当部と平瓦部の接合は平瓦部の下部に横方向の櫛目が観察できる。

6 瓦当文様は中心に珠文を置き、その下部に三日月状のものを二つ重ねた独特の中心飾りを持つ均整唐草文を付ける軒平瓦である。瓦当の左半と平瓦部が失われている。瓦当の接合は瓦当の上部に瓦当面に平行する方向に櫛目を入れ、接合した事がわかる。胎土は砂質は弱く焼きは良いが瓦当面等の残りは良くない。瓦当面には離れ砂が付着する。

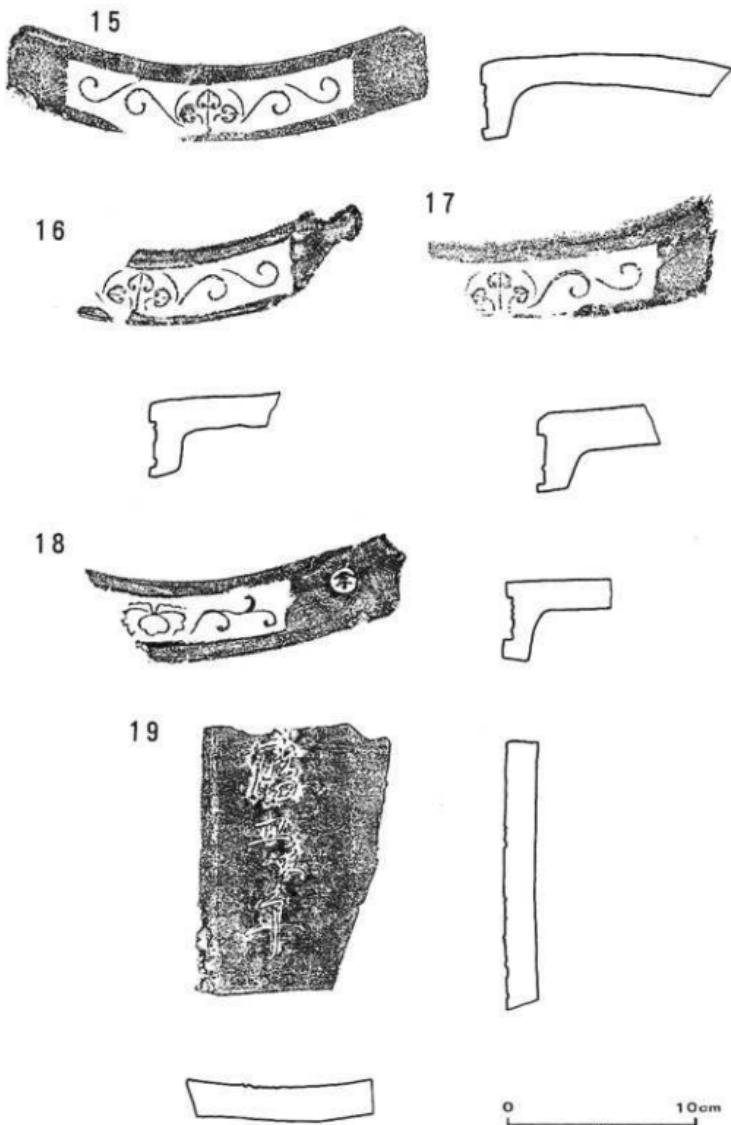
7 6・8と同じ文様をもつ軒平瓦で、胎土は砂質が弱く、焼成は悪い、瓦当面に離れ砂が付着



第8図 出土瓦拓影図(2)



第9図 出土瓦拓影図（3）



第10図 出土瓦拓影図 (4)

する。平瓦部の厚さは25mmをはかる。

8 6・7と同じ文様をもつ軒平瓦で、左半のみが残る。胎土は砂質が弱く、焼成は良い、瓦当に離れ砂と思われる砂が付着する。平瓦部の厚さは25mmをはかる。

9 中央に右巻きの三巴文を配した均整唐草文様を付ける軒平瓦である。瓦当中央のみが残る。二次的に火を受けたのか赤色を帯びる。瓦当の文様区内には砂が付着し、離れ砂と考えられる。平瓦部の凸面と凹面にも砂の付着がみられ、特に、凹面の付着は顕著である。平瓦部の厚さは15mmをはかる。

10 中央に三葉形の文様を配し、渦巻く唐草文が3反転して、とめの子葉が付く、今流行りのカオスに通ずるような、簡略ななかにも華麗な均整唐草文様を付ける軒平瓦である。右半のみが残る。胎土は灰白色で砂質は弱く、焼成は普通で瓦当面に離れ砂がみられる。平瓦部の厚さは15mm～20mmをはかる。

11 10と同じ文様を付ける軒平瓦で瓦当の下周縁部が欠けている。胎土は白色で砂質は弱く焼成は悪い、したがって表面の風化がひどく、文様区内の離れ砂はわからないが、左周縁と平瓦部には砂の付着がみられる。瓦当上端部は瓦当面に傾斜している。また、平瓦凹面左端には布目痕が残っている。平瓦部と瓦当部の胎土には目立った差異はみられない。平瓦部の厚みは20mm～24mmをはかる。

12 瓦当の中央部分のみ残る、胎土は砂質が強く、灰青色で焼成は良好、瓦当部と平瓦部の胎土の違いが顕著である。瓦当文様は13、14と同じ均整唐草文様である。しかし、それぞれ、線の太さ、唐草の巻き込み具合、中心飾りに微細な違いがあり、3点とも違う范型により作成されたと考えられる。12は他より線が太く唐草の巻き込んだ部分の先端が丸くふくらんでいる。瓦当部分には細かな砂が付着し離れ砂と考えられる。瓦当の裏面や平瓦部にも同様の砂が付着する。瓦当部と平瓦部の接合は、接合部分の平瓦部凸面に横方向の櫛目がみられる。ただし、瓦当部の上面にも櫛目が付けられていた形跡がある。平瓦部の厚さは21mmをはかる。

13 12・14と同じ文様をもつ軒平瓦である。胎土は砂質が強く、灰青色で焼成はすこぶる良い瓦当部には離れ砂と考えられる細かい砂が付着する。瓦当裏面と平瓦部凸面にはなで調整がみられる。瓦当裏面には横方向のなでがみらる、ただし中央部分に横方向の上に縦方向のなでが、部分的に施されている。平瓦部の凸面の瓦当部との接合部分には横方向のなでが1cmのほどの巾でみられる。瓦当部と平瓦部の接合は平瓦部の凸面に横方向の櫛目がみられる。平瓦部の厚みは20mmをはかる。

14 12・13と同じ瓦当文様を付ける。文様の特長は唐草の巻き込みが他より強く巻き込んでいる事である。瓦当の左半のみが残る。平瓦部は残っていない。胎土は砂質が強く色調は灰青色で焼成は良好、瓦当面には白い離れ砂が付着する。瓦当部と平瓦部の接合は瓦当部の上部に櫛目がみられる。平瓦部の厚みは15mmをはかる。

15 中央に、12代城主本多氏の家紋である立葵文を配する均整唐草文様をつける軒平瓦である。年記はないが、家紋によって本多氏の在城期間、正保2年(1645)～天和2年(1682)までの間に作

られた瓦である事がわかる。瓦当文様は16・17と同じだが、第2唐草の始まり方等に差異がみられる。胎土は砂質が強く色調は濃灰色で、焼成はすこぶる良好で陶質となっていて、表面の砂がガラス状に融解している。表面は銀色の光沢がある。平瓦部の厚みは15mmである。

16 15・17と同じ瓦当文様の軒平瓦で瓦当面の左半が残る。胎土は砂質が強く色調は灰青色で焼成は良好、瓦当部と平瓦部との接合は平瓦部の凸面に横方向の櫛目がみられる。瓦当の表面に離れ砂と思われる砂が付着する。平瓦部の両面にもみられる。平瓦部の厚さは15mmをはかる。

17 15・16と同じ瓦当文様をもつ軒平瓦で、胎土は砂質がすこぶる強く、色調は灰白色で焼成は良好、瓦当上端の角が面取りしてある。平瓦部の厚さは20mmをはかる。この瓦は13と14と同じく立葵文を付ける軒平瓦であるが、文様の細部に差異がある事、胎土が前2点にくらべ砂質が異常に多い事、平瓦部の厚さが違う事、瓦当部上端の面取りが頗る事等、いくつかの差異がみられる。

### 3. 軒棟瓦

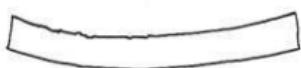
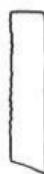
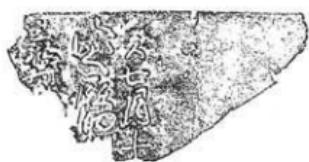
18 現状では瓦当の左半のみが残るだけであるが、形態や文様から軒棟瓦の一部であると考えられる。瓦当の文様は均整唐草文で、瓦当の左周縁には△の刻印があり山本と読める事から城の北西に位置する城東郡美輪村（現、袋井市三輪）の瓦師山本氏を示す刻印と考えられる。全体に横方向のなでがみられ、胎土は砂質が比較的強く、2~5mmほどの粘土の粒子がみられる。瓦当面には雲母粉の付着がみられる。平瓦部の厚みは15mmをはかる。

### 4. へら書き瓦

19 平瓦の凹面に年号がへら書きされた瓦である。ほとんどが失われ、年号の全文は分からぬが、「暦五亥年」から宝暦5年（1755）と判断できる。瓦の焼成前の半乾き状態の時にへら先で書かれたと考えられる。凹面はていねいにへらみがきされ、側面はなで調整、裏面は未調整である。へら書きはへらみがきの後書かれている。胎土は砂質が弱く焼成は良好である。

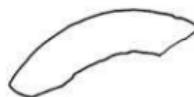
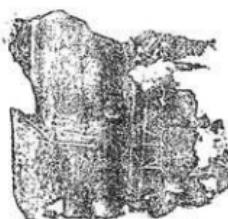
20 19と同じように平瓦の凹面に年月日などがへら書きされている瓦である。現状では3行が残る。3行ともに下半は欠落し全文は分からぬ。向かって左から1行目が「三輪村」2行目が「宝暦」3行目が「亥七月十」と読める。1行目の三輪村は前述した城東郡三輪村の事で、現在も瓦屋がある。他の出土例や町内の恩高寺にある横須賀城の瓦から城の瓦師は三輪村の山本左衛門とわかっている。この瓦にも三輪村の下に瓦師の名が入っていたと考えられる。二行目三行目は作成年月日を示す。前述の瓦と同じく宝暦五年の七月十何日に作成されたとわかる。今までに出土した年号入りの瓦は天保年間、元文年間、安政年間等の年号がみられるが、そのなかでも宝暦の年号が入った瓦が多い、この宝暦年間に興味深い逸話があるので紹介する。それは『横須賀根元歴代明鑑』と言う江戸時代中期頃に記載された文書で、横須賀藩、横須賀町の事などが克明に書かれている。その中に第14代城主で老中もつとめた西尾忠尚の数々の逸話が記載されている。少々長くなるが興味深い逸話が多いので抜粋して紹介する。「横須賀數代ノ御城主ノ内西尾隱岐守忠直公 中略 ニ至テ御高名日本國中ニ顕ル玉フ御少知タレ共大勇ノ名君ニテ御鷹又ハ相撲ヲ好被遊」が始まり、この後、大闘、闘智、小結等のお抱え力士や家臣や領内からも広く相撲

20



22

21



23



24



25



第11図 出土瓦拓影図（5）

好きを集め、城内の書院前の庭に土俵を作つて、毎月8日18日28日に相撲をとらせ、領内はもちろん他領にも触れをだして人を呼び集め、城内で相撲を観せたとあり「田舎ニテケ様の角力見物致事珍敷誠に大主の御影ニテ其時生し逢候下々の仕合ニ候」と著者は感激している。このように領内にスポーツの振興をはかったり、江戸から花火を取り寄せ、町人まで花火見物をさせたりしている。この他にも数々の逸話が記載されており稀にみる先進的な考えをもった名君であったとおもわれる。前置きが大変長くなつたが、この瓦に関連する次の一文を紹介したい。「何レ故丹後守様ヨリ以来の名君ニテ當城も方々御普請就中塚の屋根昔ハ小板葺目成りしを瓦ニ被遊其外御多門御長屋御馬屋迄不残瓦ニ成シハ偏ニ忠尚公之御代ニテ横須賀中興の名君と可奉仰」とあり忠尚が城内の塚を始めとする諸建物の瓦屋根化をすすめた事がわかる。西尾忠尚は宝暦10年3月5日に亡くなっている。したがつて20や19の瓦に記されている宝暦5年は城の瓦屋根化がすすめられていた時期に作成された瓦であり興味深い。

21 平瓦の凸面に人面が描かれている珍しい瓦である。絵は一線のみで描かれ、簡略化されているが、眉と目をつり上げ、口をへの字に曲げ、歌舞伎役者が見栄を切った時のような表情が良く表現されている。絵心のある瓦師が仕事の合間に息抜きにさと書いた感じが良く出ていておもしろい。その表情の表現などからすると浮世絵の役者絵などを参考にしたとも思われる。

胎土は砂質が非常に強く、灰色で焼成は良い。

22 丸瓦の凸面に縦方向に二行に文字がみられる、前後部分の瓦が欠けており、また、一行目の中央部分も欠損して、元の文章がどの程度の長さの文章であったかはっきりしない。6文字はなんとかわかるが、ひらがなの「ん」や漢字の「一」「等」のような文字がわかるが他は今のところ判読できていない。年号や作者の記名等ではなく、和歌のような文章の一部であると考えられる。文字は半乾きの時に先の尖った釘のようなもので書かれたと考えられる。胎土は砂質が弱く灰青色で焼成は良好である。前述のとおり、年号や瓦師の名が記された瓦はいくつか出土しているが、何らかの文章が記された瓦は、今までに横須賀城では出土例がなく、珍しい。

##### 5. 刻印入り瓦

いずれも平瓦の側面に産地や作成者を示すと考えられる刻印が押された瓦である。

23 円形の枠の内に、線の太い一文字状のものが押されている、あるいは竹管状のものを押しつけて付けられたのかもしれない。

24 円形の枠のなかに×あるいは十字が浮き出て残る刻印瓦である。

25 変形した円形の枠の中に△本が残る刻印瓦で、軒棟瓦で述べたように三輪村の瓦師山本氏を示す刻印瓦である。

## ま　と　め

今回の調査は本丸前の大石垣等の復原整備をめざすと言う、大きな目的を掲げ、古絵図に描かれている本丸下の高い石垣や、その前面にあった大規模な櫓門の検出、南側から櫓門をへて本丸の平坦面へ上がる上がり道の検出を大きな目標としておこなわれた。しかし、平坦面は永年の耕作によって破壊され、建物跡等の遺構はほとんど検出できなかった。斜面の遺構についても台風等で崩落しており残りは良くなかった。櫓門跡の遺構が検出できなかった事は大変残念な事と思う。しかし、堆積物により破壊をまぬがれた斜面の下場部分については、比較的の遺構が残っており、石垣の根石列などが検出できた。このように、幸いにも、全体のポイントとなる遺構は検出され、数年以内に計画されている一帯の復元整備の貴重な資料を提供する事が出来た事は大きな成果であった。特に、本丸前の石垣の根石列の検出は、ここにあった高い石垣の復元の貴重な材料となるもので、復原整備に向けての大きな前進と考えられる。本丸前の高い石垣が復原されれば、城としての景観が増し、印象が相当変わってくると思われる。特に、この石垣は近世の城郭としては珍しい丸礎積みの石垣であり、復原についても地元で産出する同じ材質の石を使って復原する。したがって、復原が完成すれば全国的にも珍しい丸礎積みの高い石垣となり、他の城と違った独特の雰囲気をもった城跡となる。また、丸礎の石垣の復原については、広く町内に石の寄贈を呼びかける計画もあり、これにより横須賀城跡の復原整備に対する町民の更なる理解と、意識の高揚をもたらす事が期待される。

今後の復原整備事業の進展がたのしみである。

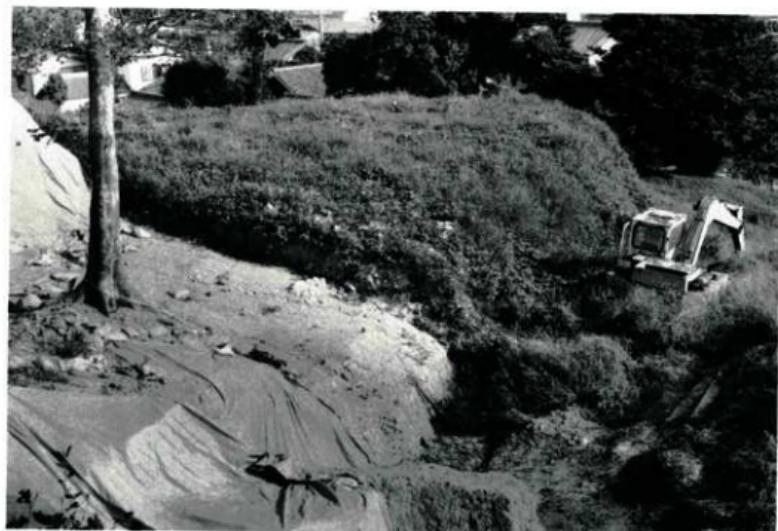
### 〔主要参考文献〕

- 袋井市教育委員会 1990 『久野城跡－平成元年度基礎資料収集調査概報－』  
袋井市教育委員会 1991 『久野城跡－平成2年度基礎資料収集調査概報－』  
袋井市教育委員会 1992 『久野城跡－平成3年度基礎資料収集調査概報－』  
大手前女子大学 1997 『大坂城三の丸跡の調査 III』  
坪井利弘 1981 『古建築の瓦屋根-伝統の美と技術-』  
坪井利弘 1986 『図鑑瓦屋根』  
堺市教育委員会 1997 『堺環濠都市遺跡(SKT79)発掘調査報告－堺市文化財調査報告  
第37集－』  
江戸遺跡研究会 1989 『江戸の住空間とその周辺』



# 図 版





調査前状況(北より)



遺構全景(西より)



遺構全景(南より)



本丸突出部西斜面舌状台地(西より)



横門東側  
舌状台地  
(西より)



横門東側  
舌状台地  
(南より)



作業風景

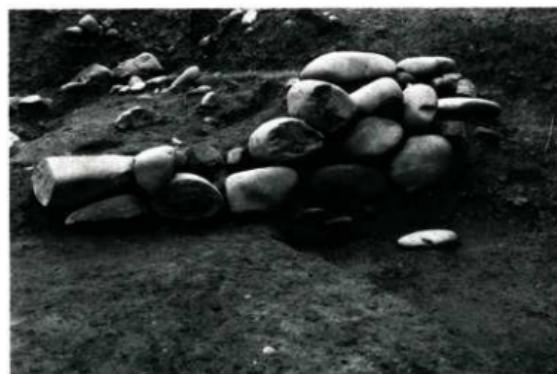
図版  
4



遺構01  
上り道状遺構  
(西より)



遺構01  
上り道状遺構  
(南より)



遺構01  
石積み全体  
(南より)



遺構01  
石積み  
(西より)

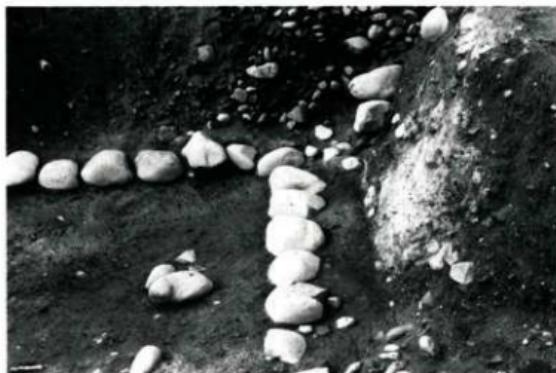


遺構01  
石積み状態  
(南より)



遺構02  
幢門平担面東北コーナー  
(南より)

図版  
6



遺構02  
東北コーナーと  
青色粘土埋め立て  
(南より)



遺構02  
東北コーナー石列  
(東上面より)



遺構02  
新旧東北コーナーと  
石垣裏込め栗石  
(東上面より)



遺構02、03と  
石垣裏込め栗石  
(南より)



遺構03  
石垣根石列  
(東より)



遺構03、02  
石垣根石列  
(西より)

図版  
8



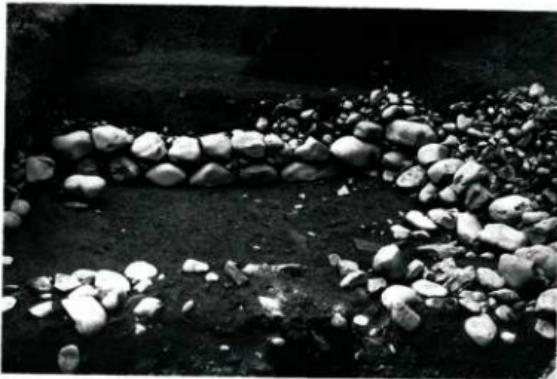
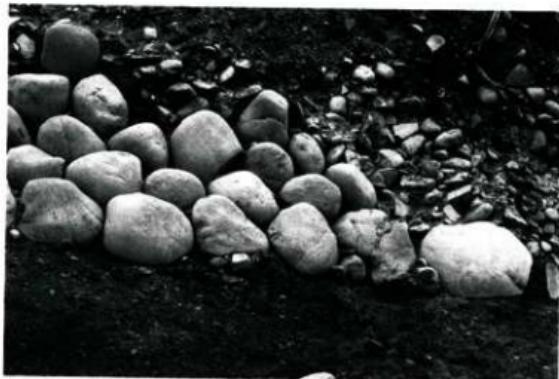
遺構03  
石垣根石  
据え方状態  
(南より)



遺構04石垣  
(西より)



遺構04石垣  
北半部分  
(西より)





遺構05  
西北コーナー石垣  
(南より)



遺構05  
西北コーナー  
(東上面より)



遺構05  
北側石垣  
石組み状態  
(南側より)



遺構06,07  
(西より)



遺構06  
(東より)



遺構07  
(東より)



遺構08  
(南より)



遺構08  
(東より)



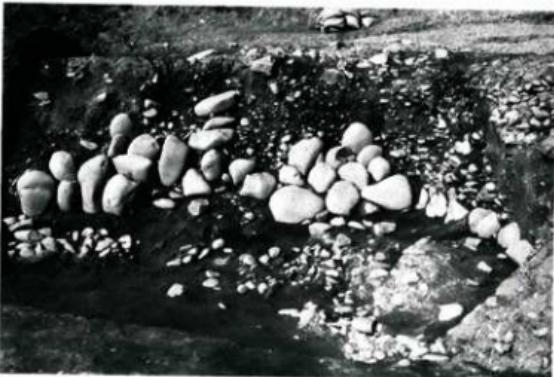
遺構08  
遺構内遺物  
出土状態  
(南より)



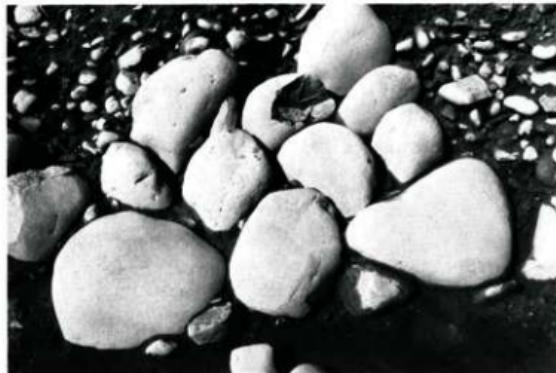
遺構08  
石積み状態  
(南より)



遺構12、13  
橋門下東西コーナー  
石垣および裏込め  
(南より)



遺構12  
橋門下西側  
コーナー石垣  
(東より)



造構12  
北半石積状態  
(東より)



造構12  
南半石積み状態  
(東より)



造構12  
北側屈折部根石  
(南より)

造構13  
橋門下東側コーナー  
石垣  
(南より)



造構13  
コーナー部と裏込め  
(南より)



造構13  
コーナー部分  
(北上面より)





門前スロープ状  
張出部分  
瓦溜り  
(南より)



瓦溜りおよび  
スロープ西側石垣  
裏込分布状態  
(西より)



瓦堆積状態



瓦瀧り  
立葵文軒丸瓦  
検出状態



遺構14  
(南より)



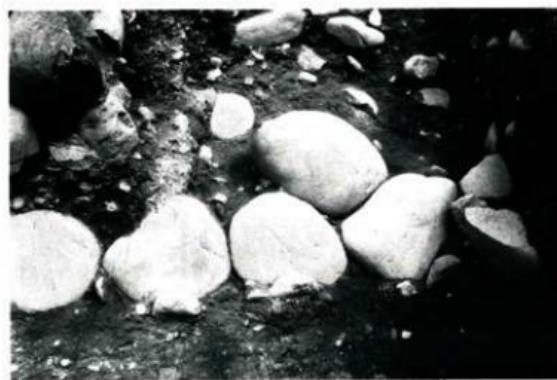
遺構14  
(東より)



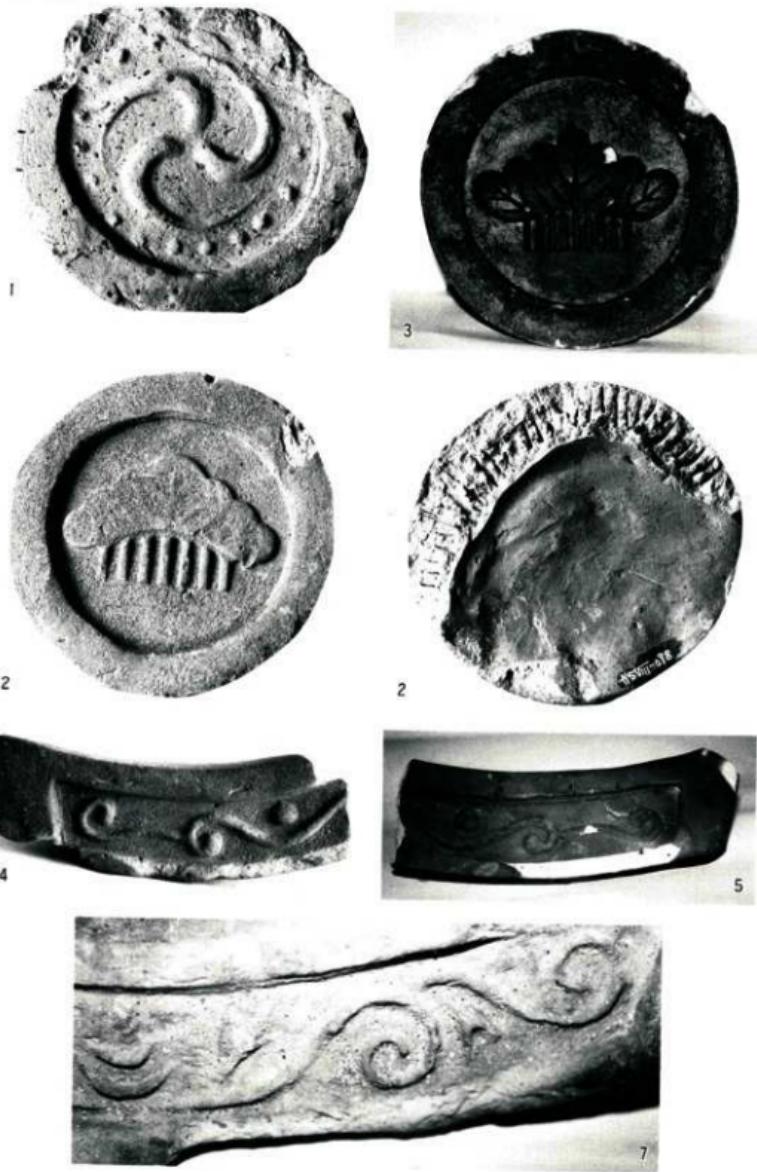
遺構14  
石列石組状態  
(南より)



遺構16  
(西より)



遺構16  
掘石状態  
(西より)



出土遺構 2

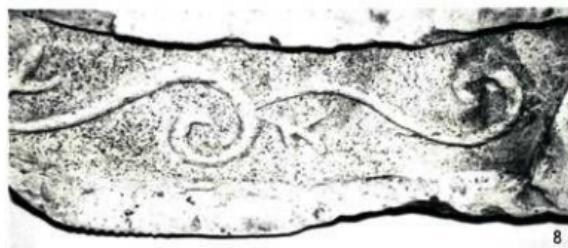
図版  
20



7



8



8



9



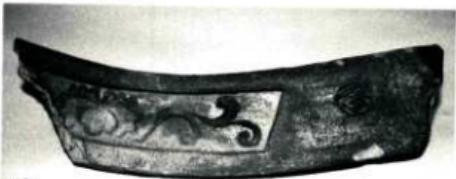
9



10



10



図版  
22



19



20



21



23



25



24



22



11



11

史跡横須賀城跡Ⅷ・IX

平成3年度・4年度保存修理事業報告

平成5年3月31日

編集発行 大須賀町教育委員会

印刷所 株式会社 三創  
静岡市中村町166-1  
電話(054)282-4031







